

編集後記：「昔のヤツには覇気があった。昔のヤツには夢があった」。最近、何度かそうつぶやいた。

先ず、台所の床の隙間から出てきた昭和60年代の古新聞を目にした時。染みついた古新聞の片隅に掲載された小さな記事の行間から執筆した記者のメッセージが約10年の時を越えてずしりと伝わってくる。例えば、地球環境についての問題提起など少しも古くなっていない。

次に、昭和50年代のスポーツ番組の録画を見た時。アナウンサーはただ実況を中継しているだけではない。選手はどういう練習をしてきたのか、今日はどんな体調なのか、どうして勝ったのか、……。アナウンサーの語る一句一句からテレビ画面の選手の人物像、人生観までもひしひしと伝わってくる。

そして、気象庁図書館で一昔前の「天気」に出会った時。一瞬、息をのんだ。探していた海陸風に関する文献などもうどうでもよかった。昭和30年代の「天気」の一頁一頁に視線は釘づけとなった。誌面から昭和中期の気象界の発展が手にとるようによくわかる。

「天気」は昭和29年に創刊号が世に出て、その歴史は始まった。当初の主要項目は「解説」、「報文」、「読者だより」などであり、大筋は現在と変わっていない。主な相違点は表紙裏の写真が「白黒」から現在の「カラー」に変わったくらいだ。だが、雲写真（第1巻の「尾瀬の雲」など）を見ると、「白黒」写真の方が迫力があるような気がする。昔の人はシャッターチャンス逃していない。

時代はスピード化している。すでに十年一昔ではなく一年一昔の時代に入った感もする。この時代の変化

に「天気」はいかに対応していくか。常に一步先を見据え、新しい発想を持って対処していくことが重要であることは言うまでもない。それ以上に大切なことは「天気」の変えてよい柱と変えてはならぬ柱を常に見極めていくことであろう。不易流行（芭蕉の俳諧用語）という言葉に常に考えておかななくてはならない。

今、46年目の平成11年度、「天気」編集委員会のメンバーが揃って早4か月だ。編集委員は学会会員から送付された「論文」、「短報」、「解説」などを新誌面に最大限生かそうと、余暇もなく無報酬の兼業に日夜奮闘している。常に、一つのパラグラフ、一つのセンテンス、一つのフレーズに誤植がないか神経をすり減らしている。たとえ「天気」全体の頁数が少なくても、協力して内容に十分重みを持たせている。また、当然のことながら視野を広げ、常に他の学会、分野にもアンテナを張っている。

昭和29年の創刊号の冒頭に述べられているが、「天気」は読者の声が直接反映する月刊誌であることが望まれる。内容豊富な充実した「天気」を現在のみならず後世に遺していくためにも、改めて読者の皆様にはより一層の投稿をお願いしたい。

「天気」は絶えず磨かれ、成長、発展していかなければならない。さらに、気象界の発展のために「天気」は常にリーダーシップをとっていく必要がある。

最後に、昔のヤツは掲げた目標に自分の命を全部かけていた。逆境の中でも発憤し、後世に不朽の作を遺した。我々現代人も……。それでは、次号にご期待下さい。

(木下 仁)

「天気」編集委員会

編集委員長 新野 宏(理事)

編集委員 神沢 博(理事)・関口理郎(理事)

藤部文昭(理事)・植田宏昭

大野滋規・小田切さやか

大淵 濟・木下 仁・小出 寛

小司 禎教・住 明正・田口晶彦

高橋 宙・中村 尚・新村典子

板東恭子・本田有機・別所康太郎

水野孝則・水野 量・安田宏明

山本 哲

地区編集委員 北海道 北見康男・上田 博

東北 栗原弘一・早坂忠裕

関東 河原幹雄

中部 岩坂泰信・坪木和久

関西 半澤洋一・山中大学

九州 迫田優一・中島健介

沖縄 豊見山 浩

編集書記 遠藤和子